

本部だより

●第13号



マーシャル方面遺族会



ケゼリン島現地慰霊祭（平成17年10月6日）

謹賀新年

平成十八年元旦



本部役員及び篤志会員

相談役 大給湛子

幹事 佐竹エス

会長 黒川 誠

同 草場 寛

常任幹事 荒木常子

同 晝間志津子

同 高橋鎮夫

篤志会員

幹事 高林芳夫

徳原徳子

同 山口良二

山村 要

平成十八年度

慰霊祭・総会・直会のご案内

会長 黒川 誠

会員、会友の皆様にはお健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

本年の慰霊祭・総会・直会を次の通り行います。

皆様お誘い合わせてご参加下さいますよう、お待ちしております。

◆ 慰霊祭

日時 平成十八年四月一日(土)

午前九時 当日は日曜日ではありませんが、くれぐれもお間違いないようにご注意ください。

受付 靖国神社参集殿前 出席名簿と照合なさらない方は昇殿参拝ができません。当会参加者専用ワッペンをお渡し致しますので胸にお貼り下さい。

慰霊祭 午前十時ご本殿

◆ 定期総会

慰霊祭後、靖国神社内・靖国会館前にて記念撮影後、同館二階(田安・玉垣の間)で行います。

◆ 直会

総会終了後、その場所が直会会場となります。閉会は三時の予定です。

● お願い

◆ 同封の出欠はがきは、欠席される方も各項目にご記入戴き、二月末日までに本部に着くようにご投函下さい。

◆ 本会への賛助金、直会費(四千五百円)、玉串料(一名五百円)は、すべて同封の郵便振替用紙で二月末日

までにお送り下さい。

◆ 当日、受付では現金の取り扱いが致しません。必ず郵便振替にてお願い致します。

◆ 九段会館に宿泊をご希望の方は、各自で直接九段会館にお申し込み下さい。ご存じの通り慰霊祭の前後は参拝の団体も多く、収容が困難な状態です。三月二十日まではお申し込み下さい。期日が過ぎますと宿泊は不可能となりますのでご注意ください。

◆ 九段会館宿泊部(東京都千代田区九段一の六の六・電話03・3261・5521)

平成十七年度
マーシャル方面遺族会

永代神楽命日祭奉奏

昨年七月靖国神社の光の祭典「みたままつり」が行われました。みたままつりは靖国神社が戦没者二百四十六万六千余柱の「みたま」を慰めるために戦後の昭和二十二年から始めたもので、昨年で五十九回目です。境内に飾られた二万九千灯を超す懸雪洞(かけほんぼり)や献灯

は九段の夜空を美しく彩り、東京の夏の風物詩として親しまれ、毎年三十万人の人出で賑わっています。

本会の命日祭は、みたままつりの第二日、七月十五日午後二時より執行されました。当日の出席者は次の通りです。

黒川誠 黒川真吉 高林芳夫 草場寛
 榊崎馨 森田稔二 吉田正明 荒木常子
 佐竹エス 佐藤知子 富田ミツ 富田キミ
 森井静子 森井早苗(写真左)

永代神楽祭出席者(靖国神社参集殿応接室)



平成十七年 マーシャル・ギルバート諸島戦没者現地慰霊巡拝

主催 マーシャル方面遺族会

日程 平成十七年十月三日から十月九日までの七日間

場所 クエゼリン島 ルオット島

平成十七年現地慰霊の報告

高林芳夫（幹事）

参加者は次の二十一名でした。

泉水堯恵・腰川妙子・伊藤十一・伊藤政一・井上賀雄・井上庸子・植田敏裕・奥井國夫・奥井禮子・菊地彦亘・佐竹エス・佐藤知子・佐藤隆一・鈴木進・鈴木友季子・浜田芳枝・藤田正勝・藤原和子・森井静子・油井芳枝・高林芳夫（順不同）

●日程

◇十月三日（月） 東京駅午後二時集合。バスにて靖国神社参拝後成田ホテルへ。

結団式。成田泊。

◇十月四日（火） 成田発十時三十分グアムへ。着十五時。グアム泊。

◇十月五日（水） グアム発八時十分。クエゼリンへ。着十七時二十五分。クエゼリン泊。

◇十月六日（木） 慰霊祭。慰霊碑の清掃。島内散策。クエゼリン泊。

◇十月七日（金） ルオット島にて慰霊祭。クエゼリン泊。

◇十月八日（土） クエゼリン発十二時二十分グアムへ。着十七時十五分。グアム泊。

◇十月九日（日） グアム発十六時三十分。成田へ。着十九時十五分。通関後解散。

●慰霊の感想

今回の慰霊の旅は汗・涙・笑い・それに感謝感激の旅でした。

感謝 まず、クエゼリンに着いたとき

空港で司令官自から我々一行を出迎えて下さったこと。新司令官は女性で名前はスタイブさんといえます。

慰霊祭の時、わざわざ墓地まで来て下さり、次のような挨拶を戴きました。

「皆様ようこそクエゼリンへお越し下さいました。皆様を心より歓迎致します。これからもいつでもお参りに来て下さい。歓迎致します」。

また一人ひとりに記念のメダルをプレゼントして下さいました。慰霊碑前にはテントとイスの用意がされていて心のもった歓迎に一同感激しました。また今回の慰霊には米国人でクエゼリン出身の東大生グレッグ・ドボルザークさんが私たちのために里帰りして下さい、通訳を引き受けて下さいました。

涙 慰霊祭では参加者一人ひとり碑の前に進み出て積年の思いを父に夫に兄に語りかけ、追悼文も涙で読めなくなるほどでした。全員思いっきり泣いて来ました。

汗 慰霊祭の後、昼食を戴き、後片付けをしました、そのとき碑の清掃を全員で行いました、碑をタワシ、歯ブラシで

磨く人、周りの玉石を磨く人、暑い中全員汗びっしょりの掃除で碑も周りもきれいになりました。英霊も風呂に入ったようでさぞさっぱりされたことでしょう。

感激 ルオット島へ行くには通常飛行機で行きますが、機は十九人乗りで一行は二十一名です。当初の予定ではルオット島関係者五名のみ墓参を覚悟しておりました。

ところが、司令官のご好意で全員お参りに行くようにと、双胴の高速艇を用意して下さいました。片道二時間半の快適な船旅でした、思いも寄らぬ全員での慰霊祭ができましたこと、感謝感激です。ありがとうございます。

笑い 今回の慰霊では沢山の歌を歌って来ました。まず各慰霊祭では佐藤知子さん指揮のもと、車座になり「海ゆかば」「ふるさと」「里の秋」を合唱しました。クエゼリン最後の夜は全員一室に集まり大合唱になりました。昭和五十年最初の慰霊に行ったとき、マジユロで教わった「あの椰子の島」を井上さん指導のもと何回も何回も練習して覚えてきました。またグレック・ドボルザーくさん

のマーシャルのわらべうたや添乗員田村さんのラジオ体操の歌、伊藤さん油井さん藤原さんによる三部合唱「長野県の歌」やその他童謡もたくさん歌いました。歌

の最後に植田敏裕さんリードによる「夕焼けこやけ」の大合唱がはじまりました。植田さんの自信に満ちた歌い方につ

られて全員一糸乱れず最後まで歌いきりました。すかさず奥井さん（植田さんのお姉さん）が、「敏裕ちよつと違うじゃろうが」の一言に皆ハッと気付いたら確かに違っていました。それは「夕焼けこやけ」の歌詞を「赤とんぼ」のメロディーで歌っていたのです。リハールもなしで全員揃ってうまく歌えたものです。大爆笑が収まりません、いかに皆さんの心がひとつにまとまっていたかの証でしょう。（これをお読みの方も一度歌ってみて下さい）。

またグアムでは解団式の最後に、またの再会を誓って「あの椰子の島」を合唱しました。今回の現地慰霊の旅は皆さんのおかげでとても素晴らしく楽しい旅となりました。またこの度の現地慰霊には黒川会長はじめ、大勢の方々の御尽力を

戴きましたこと、厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

奥井禮子（広島県）

クエゼリン慰霊も終わり、早一カ月が経とうとしています。眼前にクエゼリン島の美しい景色が浮かび、いろいろな思い出でいっぱいです。このたびの慰霊も同じ思いの人の集まりで、初めてここでお会いした方からも、前々からのお友達のように親切にしてください、なごやかに楽しい思い出の多い旅でした。

戦死した兄もさぞ喜んでいいると思います。飛行場へのスタイプ司令官の出迎え、心づくしのおもてなしをいただき、涙、涙でした。

ルオット島の慰霊にも参加出来るよう、司令官に豪華な船まで用意していただき、美しい海を眺めながら心安らぐ慰霊にさせていただきました。何度行ってもきれいなクエゼリン島、また来るねーと飛行機に乗りました。皆様にもまたお会いできるよう、心して生活している今日です。

泉水堯恵（千葉県）

南の島に行きたい。父に会いたい。そして慰霊に行こうとの思いをふくらませ祈るような気持ちで新年を迎え、出発の日を待った。

若者で溢れかえる空港で「おばさん達何処へ行くの」と尋ねられた。慰霊よ、と言うと、怪訝な顔をして「イレイ？」と言った。日本語として失ってほしくない言葉だが、この世代の人達には慰霊がどんな意味を持つのか。そしてこの裏に隠された悲しい数々のドラマがあった事など理解できないのかもしれない。斯く言う私も今こうして慰霊に行かれる平和さを当然のこととして感謝のかけらも持ち合わせていないのは若者と同類である。

重いものを引きずりながら紺碧のコバルトブルーのクエゼリンに降りた。環礁の島は椰子の林に囲まれ南洋の様相を呈しており、変わってはいなかった。厳かに静粛に慰霊祭が執り行われた。慰霊祭ってなーに、霊を慰めること、霊を慰めるってどうということ、自身に問うた。

このマーシャル諸島海域で戦死された何万人の英霊は、みな愛する國や家族の未来を守るために尊い一命を捧げられたのだと思う。今その碑の前に立って、二十一名が各々の思いで追悼の言葉を述べ、香華を手向けた。

英霊も歌ったであろう歌を全員で合唱した。歌声は灼熱の島々に流れた。見事に調和のとれた旋律に私は酔った。終わって心の中は得も言われぬ馥郁としたまろやかな心になっていく事に気づいた。私達は碑の前に立って深くこうべを垂れ、冥福を祈るけれども慰霊をすることにより反対に英霊の方々から優しさや和やかさの心を貰っていたのではないだろうか。謙虚になればこそ見えてくる気づきを四回目の慰霊で初めて出会わせて貰った。

掘り下げて考えれば、英霊を土台にして成り立っているこの平和がいつまでも続くよう、慰霊で貰った心を「うもれ火」として心に埋めよう。

そして争いやもめ事が多少なりとも減ることを願って、自分の周りを蛍のような淡い小さな灯で照らすことがもじできるとすれば慰霊の功德は地に生きて無辺

に人々の心の中で生きてくれると思う。

浜田芳枝（愛知県）

平成元年に初めて政府主催の「マーシャル方面現地慰霊祭」に参加しました。そして今回「マーシャル方面遺族会」の慰霊に参加することができました。初めての時は現地慰霊が出来るとは思っていませんでしたので、無我夢中で緊張のし通しでした。マジユロを起点にしてクエゼリンには日帰りの慰霊でしたが、父が戦死した地に初めて降り立ったときは、なぜか懐かしく、不思議な気持ちになりました。そしてあまりにもきれいなところびびくりしました。父がこんなきれいなところで眠っているのならと、自分を納得させました。

あれから十七年、いつかもう一度、今度は落ち着いた目で見て来たいとずーと思っておりましたが、気力も体力も自信がなく、決心がつかないままでした。今年の春、佐竹さんからお誘いのお電話をいただき、今回こそ何があっても行かなければと、絶対に行こうと思ひ、体調に



参加者揃っての「ルオット島慰霊祭」を実現させた双胴船

も気を遣い、準備して来ました。

その甲斐があつて皆様と出会うことが出来ました。クエゼリンの慰霊と合わせ、スタイブ司令官の特別なご配慮によるルオット島への慰霊は素晴らしい時間でした。記憶にない父の懐に抱かれていたようなクエゼリンにての宿泊でした。何ものにも代え難い、言い尽くせないほどの感動と感謝と出合いの一週間でした。

帰国の前夜、ヤシの葉影から見たお月

様、そして帰国の朝見た水平線の彼方か

ら力強くオレンジ色に輝く日の出、慰霊碑の掃除、食事の時間、そして亡くなった方々もほほえましく聞いて下さったと思われる、植田さんご指導の楽しかった合唱等々、忘れられない思い出がいっぱい詰まった一週間でした。現地の方々、ご一緒した方々、大変にお世話になりました。ありがとうございます。

菊池彦巨（栃木県）

マーシャル方面遺族会主催の現地慰霊団二十一名は、十月六日、クエゼリン島慰霊祭を執り行い、翌七日には、スタイブ司令官の特別の計らいで全員ルオット島に行けることになりました。飛行機の定員を超えるため、双胴の高速艇を用意していただき、渡ることができました。従来はルオット島の慰霊祭は関係者のみで行ってきましたが、今回は一昨年に続いて全員で慰霊祭を執り行うことができました。ルオット島の桟橋付近の海の色は、黄緑で透明度が高く熱帯魚の泳いでいるのがみられました。

案内役として、テラー報道官夫妻お

よび東京大学大学院生のグレッグ・ドボルザーク氏（案内兼通訳）が同行されました。ルオット島の桟橋にはフロイド・コーダー管理責任者が私達一行を出迎えてくれました。ルオット島の墓地もクエゼリン島同様に墓地は綺麗に清掃管理されていました。参道の左右にはテントが張られ、そこには椅子が用意されていました。十月五日のクエゼリン空港に到着の際、スタイブ司令官自ら私達一行を出迎えられ、六日の慰霊祭当日には記念品等用意されて一人一人に手渡しされ歓迎してくれました。私たちに対する司令官の心遣いが現れていました。

墓碑を清掃し、祭礼の準備が整い、それぞれ持参した供物を供えて、高林さん司会の式次第により進行しました。井上団長の「追悼の辞」に続いて関係者の追悼の言葉があり、泉水さんと般若心経の合掌、佐藤さん指揮による「海ゆかば、ふるさと、里の秋」等の合唱をし、戦没者慰霊祭が執り行われました。先の大戦により遠いこの南国の地で、苦しい戦いの末に散華した兄の無念さを思い浮かべ、

悲しみとやりきれない思いでした。祖国から遠い南国のこの地で祖国のために全員が散華されました。御霊の霊が心安らかに眠りできますようにと心からご冥福をお祈りしました。なお、祭礼の準備中、鳩に似たスマートな白い小鳥二羽が飛来して基地内の木の梢に止まりましたが、カメラに撮ることなく瞬時に飛び去って行きました。その小鳥の名が「ケアル」と言うことを奥井さんから教えていただきました。

昭和十九年二月から数えて本年は六十一年の歳月が経過しました。思えば昭和十八年の晩秋の夜、兄は突然帰宅して、一夜を家族と共に一家団欒の一時を過ごし、翌朝一番電車で横須賀へ帰りました。その駅頭での別れが最後となりました。あれから二ヶ月後のこととなります…。海の色は、どこまでも青く紺碧色で、外海、内海共に穏やかな海でゴミの見あたらない海岸でした。

藤田正勝（新潟県）

今回の慰霊参拝は三年振りの参加でし

た。案内を受けて久し振りに参加したいと思ひ申し込みました。御一緒される方々との再会も楽しみでした。参加者のメンバーも分かり、益々慰霊参拝及び再会の楽しみが増しました。

いつもと変わらぬスケジュールです。機内から見る島々は前回見た時と全く変わらぬ風景でした。青い空、白い雲、海の青、コバルトブルーの海、珊瑚礁の美しい島々、珊瑚礁と波打ち際の白波、島の緑、連続する美しい珊瑚礁群の連続美等に迎えられる、慰霊参拝をすることが出来ました。

何時も感じることは、旧大日本帝国は広大だったことを痛感します。慰霊碑の前では今までの色々の辛苦、喜び、家族のこと、故郷の近況及び母の死を伝え、頑張っていることを報告する事が出来ました。父の戦死から六十一年の歳月が過ぎ去り、現地に残る建物も相当風化し、倒壊の恐れすらある状況になりつつあり、島の状況も拡幅等で当時との差異もあると聞き、島自体も当時よりかなり広くなっているそうです。島の護岸部分で確認も出来ました。

墓地の脇にある木も相当大きくなっています。常日頃墓地の維持管理をしてくれる米軍関係者に御礼申し上げます。慰霊参拝の旅、井上団長の好リード、高林さんの名幹事、田村添乗員のご努力及び米軍司令官の歓迎と協力によりスムーズに参拝出来たことに感謝申し上げます。

参拝、墓地清掃、色々のコミュニケーション、シオン、食事会、ショッピング、見学、反省会、コーラス、カラオケ等を通じての親睦、参加者一同と色々の楽しい思い出を残すことが出来ましたことに感謝申し上げます。また、機会があれば慰霊参拝に行きたいと思ひます。

植田敏裕（広島県）

「海ゆかばみづく屍 山ゆかば草むす屍 大君の 辺にこそ死なぬ かえりみはせじ」

十月三日から九日まで二十一名のクエゼリン墓参団は、六十二年前のあの悲惨な戦争により父母を想い、兄弟を想い、子供を想いながら散っていった御霊に逢う旅に出かけました。それは、父の顔さ

え知らない遺児の皆さんとの慰霊の旅でもありました。

南国の青い海にくつきりと浮かんだクエゼリン空港に降り立った私の頭に浮かんだ言葉は「ごめんなさい」でした。先の大戦で幾多の皆さんが尊い命を捧げたこの土地に土足で踏み入れた事さえも自責の念にかられました。

日本から遠く離れた南国の孤島でさぞ寂しかったことでしょう。この場所で、はるかかなたの日本のことをどれほど思い浮かべられたことでしょうか。皆さまの何ともならなかった思いの丈を考えると、墓参団の一行の胸中はやるせなかったことと想います。

二十九歳、第六通信隊で散っていった兄、生きている私たち姉弟は余命の許す限り慰霊の墓参をしなくてはいけないと思います。そして現在は平和で豊かな祖国日本の礎となって下さった皆様の意志を引き継ぎ、子供や孫までに皆様のことを語っていききたいと思えます。

最後になりましたが、私たちの墓参に際してクエゼリン軍当局の手厚い歓迎には頭の下がる思いがしました。そして井

上団長、高林さん、皆様のお陰で無事に墓参が終了したことを厚く感謝致します。本当にありがとうございます。次も元気で会いしましょう。

腰川妙子（千葉県）

今回の慰霊には福の神様がいらしたのか、クエゼリンの空港に降り立った時からサブライズが始まり、最後のグアムのホテルまで続くとは誰も想像しなかったと思います。その福の神様のお裾分けを頂いたのが私たち姉妹でした。

ルオット島への慰霊がスタイブ司令官のご好意により全員の参加となり、初めての船での慰霊になりました。港を出港して間もなく添乗員の田村さんが側にいらして「この辺の海域には沢山の船が沈没している」と話して下さり、私たちの父が護衛していた商船「昭栄丸」も到着したその日に荷もろ共、船体を真っ二つにして沈没しております。昭和十八年十二月十九日でした。

いつものあたりだろうと思ってはいいたのですが、今回はからずも田村さんの

お陰で海上から手を合わせる事が出来ましたこと幸いに思っております。そしてもう一つ、トラック島に降り立った十月五日は、父たちが第一回目の航海の帰途、横須賀に向けてトラック島を出航した日でもありました。六十三年振りに降り立ち、同じ風と太陽に包まれたことも不思議な縁を感じます。

皆様方のお陰で心に残る慰霊が出来ました。ありがとうございます。グアムでのサブライズはスイートが用意されていたのです。皆さんの幸せそうな顔が忘れられません。

佐藤知子（埼玉県）

昨年に引き続き慰霊巡拝に参加することが出来た。嬉しい限りです。一行二十一名中八名は初対面でしたが、心安らぐ旅となりました。腰川さん、泉水さんの姉妹、伊藤さん兄弟、井上さんと鈴木さんのご夫妻で、そして奥井さん植田さんは一族でと皆亡き父を、或いは兄弟を想う一心で赤道直下まで出かけた事でした。いつもながら機上から見る海の

色は美しい。

クエゼリンの空港では司令官の出迎えを受ける。キリリとカッコイイ美人でした。それもナンバーワンとナンバーツーとお揃いで。

翌六日のクエゼリンでの慰霊会場には天幕と椅子を用意して下さり感激。また九時には司令官が挨拶に見え「先の大戦で平和の大切さを知った」と。そして一人ひとりに握手して記念のメダルを自ら手渡し会場を去っていったが、車が建物の陰に隠れる迄手を振っていたのが印象に残った。

亡き人は帰らない。戦争という殺人がどんなに無意味なものかを、一人でも多く気づき、この平和を大切にしなければと思う。皆で祭壇を飾り、日の丸と訪問国の旗を掲揚。そしていつも佐竹さんが持参して下さる靖国神社からの黄色い提灯を吊り、慰霊祭の準備完了。直ちに高林さんの司会で祭典は粛々と進む。クエゼリン関係者は一人ひとり追悼の言葉を捧げる。

いつもながら胸が詰まる感あり。その後全員で「般若心経、ふるさと、海ゆ

かば、里の秋」を合唱して祭典は終わる。

昼食後島内一周と碑の清掃。奥井さん、植田さんをリーダーに玉石をよけ、落ち葉やゴミを掻き出す人、碑を歯ブラシで丁寧に磨く人、瞬く間にきれいになった。やはり掃除をしたあとは清々しい。皆の顔も一段とやさしく見える。

ロッジに帰っての自由行動。歩くことはままならないが、散歩に出かける。波音が心を和ませてくれる。かくして慰霊第一日は終わる。

第二日目七日は、ルオットへの船旅となる。当初関係者だけの慰霊と思っていたのが、軍のほうで船を出して下さることになったのである。思いがけなく全員揃っての慰霊、これ以上うれしい事があるろうか。

クエゼリンを八時に出発。乗船は私達だけなので贅沢な楽しい二時間半の船旅となる。景色を楽しむ人、おしゃべりする人、グレッジさんにインタビューを受けている人。私はまず甲板に出て舳先に立った。この強い潮風、潮の香りに抱かれて暫し幼き日の会話を思い出していた。あの心の大きかったやさしく厳しかった

父との。

前方にはスコールが来ていてポツ、ポツと雨が当たるようになったので船内に入り、スコールの中を進むも、暫くして抜け出した後には雲の切れ目には虹が二重にかかり自然の美しさを見せてくれ、船旅にいつそうの花を添えてくれた。

上陸は横浜栈橋。父もこの栈橋に降り立ったと思うと胸が詰まった。過去ここには四度立っているのだけれど、船から降り立ってみると格別の思いがあった。慰霊碑の前には前日同様すでに天幕、椅子の用意がされていて、再び感謝感謝。昨年植樹されたプルメリヤは見るも無惨に棒杭と化していた。

式典は高林さんの司会で進められ心おきなくお参りする中、いつしか碑のまわりを二羽の白い鳥が舞っていた。亡き人達に替わって挨拶にみえたのか、それとも一緒に帰りたくて飛んで来たのか知るよしもないけれど、その状況は神の使いとしか言いようのないものであった。

昼食は島内のカフェテリアで頂いたが、我々のためにテーブルには白いクロスが掛けられ、花を添え用意されていた。

食事の後島内一周。初めて見る戦車の捨てられている現場、潮をかぶりながらも錆びてはいるが朽ち果ててはいない。戦後六十年も過ぎたというのに。慰霊碑のもとに戻り片付けて乗船。帰路につくも往路とは打って変わりマグロのごとく横になってる人も多い。船は航跡を残し五時クエゼリンに帰島。

夕食後一室に集まり満ち足りた慰霊に心もほぐれ話はずむ。亡き人の思いで話、歌などに時を過ごし、皆で歌った歌の中に、何と「夕焼け小焼け」を「赤とんぼ」の曲で歌っていることに気づかずほぼ終わりに近づいた頃、田村さんが「こんな歌あったっけ」にも「ウン」と返事をして歌い終わり、それからが大変という一幕があり、参加者の永遠の思い出間違いないとなった。なお、井上、高林ご両人のリードにより「あの椰子の島」を歌う。難しいけれど心に残る歌であり、九時半過ぎにお開きとなる。

八日はいよいよ帰路。荷物を空港に預け、南洋ドングリの木の下で昨夜歌った「あの椰子の島」をグレッグさんがテープに入れる。何だか歌手になった気分を

土産にグレッグさんヨウコさん達の見送りを受けクエゼリンを後に飛び立つ。夢のような滞在四日間だった。給油のため島に寄りながら宿泊地のグアムに着くこの夜はスイートルーム(?)部屋が広過ぎて不安な贅沢な一夜となった。会食は見晴らしの良い八階。解散式を兼ねての晩餐となる。特に私には具だくさんの味噌汁が圧巻であった。旅の思いでは尽きない。人種が違っても心のありようをまた一つ学んだ旅でもあった。

これも父からのプレゼントとマーシャル方面遺族会があつてのことと思う。この出会いを大切にそして大きな戦があつての今日の平和であることに感謝し、有り難さを語り継いでいかなければと思う。

親の顔を知らず今日に至るもやはり現地慰霊をすることで気持ちの整理もつき、自分を見直すことも出来、私はいつも元気をもらって帰国する。そしてまた「南十字星を見に行こう」を合い言葉に再会を約束する。参加された添乗員の田村さん、大変にお世話になりました。またお会い致しましょう。

井上賀雄 (東京都)

クエゼリンのヨウコさん初来日、東京で歓迎会を行いました

今回のクエゼリン環礁現地慰霊訪問で、私たちは、米軍司令官スタイプさんに格別の歓迎を受け、軍関係の方々にも大変お世話になりました。

特に米軍報道官テラーご夫妻には、クエゼリン島到着から出発まで何かと面倒を見ていただき、ルオット島行きの中での、報道官と夫人のヨウコさんが、私たちに島の話などをしてくれました。

そのヨウコさんから、「来月、日本に初めて行きます」との話聞きました。アメリカ在住のお母様(日系アメリカ人)が十一月に八十歳になるのを機に、妹さん、娘さんと合流して、誕生祝に母を連れて祖父母の故郷を訪ねる日本旅行を計画したようです。

私たちはマーシャルから帰国後、会長に報告、相談の結果、来日されるヨウコさんについて、マーシャル方面遺族会としては、今後とも遺族の現地慰霊や、慰



ヨーコさん歓迎会出席者（品川プリンスホテル）

霊碑の存続等についてお世話になることを勘案、歓迎会をすることになりました。歓迎会は、十一月六日（日）、品川プリンスホテル新館一階ブッフエレストラ「ハプナ」で行いました。遺族会から黒川会長、荒木、高林、佐竹、内海の各氏と巡拝参加者の一部（泉水、腰川、佐藤知子、森井の各氏と井上二人）、現地通訳などでお世話になったドルザークさん（国籍アメリカ、オーストラリア大

学から東大に留学中）、お客様で計十六名。テーブルを円形に並べて、全員お互いの顔を見ながらお話ができるようにしてもらい、まず会長の挨拶に続いて、旅の安全と皆様の幸せを祈って乾杯。和洋中華など、バイキング形式で各自それぞれ味わいました。楽しみながら、マーシャルの話、アメリカや日本の話の花を咲かせました。

ヨーコさんから「初めての日本訪問に機に、私たちのルーツでもある日本の文化、心を少しでも体得して帰りたい」とご挨拶がありました。歓迎会は和気藹々のうちに三時間を超え、全員で記念写真を撮って、御開きとなりました。

ヨーコさん一行は、自分たちで計画、予定した東京、長野、富士、箱根、京都、広島、宮島（広島会の会員、植田さん、奥井さん）に大変お世話になったようです。など、錦秋の日本観光を楽しみ、有意義に過ごされ無事帰国されました。

後日、クエゼリンからお世話になった日本の皆様へ感謝メッセージがメールで届いています。現地関係者との友好親善がいつまでも続くことを祈って。

本会よりビバリー・エム・スタイブ司令官にお礼の親書を送りました。

親愛なるビバリー・エム・スタイブ司令官閣下へ。

私共、マーシャル方面遺族会のメンバーが2005年10月5日から8日間に訪問したクエゼリン環礁で、閣下はじめ多くの皆様に、ご親切なもてなしと多大なるご配慮を賜りましたことに、衷心より厚く御礼申し上げます。

クエゼリン空港に到着した際、閣下自らお出迎えを賜り、全員感激いたしました。慰霊碑の前で、閣下の心温まるスピーチには、参列者一同深い感銘を覚えました。

また、閣下自ら私共一人ひとりに、榮譽あるUSAKA（ユーエスアーミー・クエゼリン・アトール）のメダルをいただき、誠に有難うございました。一同、貴重な記念品として大切にいたします。私共がクエゼリン環礁滞在中にいただいた多くの皆様のご親切に對して心から感謝の意を表したいと思っております。（ロイナム

スタイブ司令官への感謝状

Oct. 20 2005

Dear Honorable Commander Bevery M. Stipe

We, members of Marshall Gilbert Islands Bereaved Association are so honored and grateful for your heartfelt hospitality and attentive thoughtfulness during our visit to Kwajalein Atoll between October 5 and 8, 2005.

We were all touched when you welcomed us at the Kwajalein Airport upon our arrival.

We were deeply impressed with your heartwarming speech in front of our memorial monument.

Each of us thanks you so much for the USAKA medal, which each of us will cherish as a precious memory.

We would like to express our sincere appreciation for everything you kindly did for us during our stay in Kwajalein Atoll.

(Arrangements of a Catamaran for Roi Namur, Tents, Chairs, a Bus and many other things for us)

Please extend our thanks to your group members.

Finally, We would like to send you our best wishes for your health and success.

Sincerely yours,

Marshall Gilbert Islands Bereaved Association
President Makoto Kurokawa
黒川 誠

The leader of the visiting group
Yoshio Inoue
井上賀雄

ル鳥行ききの双胴船、慰霊碑前のテントや椅子、移動するためのバス、その他数多くのことなど)どうか、関係の方々にも、我々の感謝の気持ちをお伝え下さい。

最後に、皆様のご健康とご隆昌を心からお祈り申し上げます。敬具。

マーシャル方面遺族会

会長 黒川 誠

慰霊巡拝団团长 井上賀雄

記念品のカヌーのこと

マーシャル諸島は大変広い海域で隣の島までは数百キロもあります。その移動手段として使われていたものがカヌーです。全長は六、七メートル位で三、四名が定員です。海流を頼りにこのカヌーで太平洋を渡って行ったのですから、昔のマーシャルの人々は優秀な航海士だった

と思います。

記念品のカヌーの模型は昔は、カヌーを造る船大工さんが作っていたと聞いています。実際のカヌーには魔除けとして鳥の羽が各先端部に付いていました(山口良二・写真①②)。

特別寄稿

環礁の故郷クワジエリン島

グレッグ・ドボルザーク

(オーストラリア国立大学博士課程
東京大学特別研究員)

二〇〇五年十月、初めて「マーシャル方面遺族会」と出会い、一緒にマーシャル諸島クワジエリン島の慰霊の旅に行つた。遺族でもなく、日本人でもない私だが、兼ねてよりクワジエリンの遺族の皆さんに会うのが夢だったので、とても貴重な経験であった。

一九七〇年代、幼少時代より父の仕事の関係でクワジエリン島で十年間程過ごした。他のアメリカ人の家族と同じように、マーシャル諸島の中にある小さなアメリカの町にみえる基地に住んでいた。ただ、本当のアメリカの町と違って、日

本時代の名残やマーシャル人の存在もあった。その時から日本のことを意識していたのだろう。子供から見ても、島全体が遊園地で、自転車でいろんなところを探検したり、海に潜ったり、椰子やパンダナスの木に登ったりしていたけれど、完全に自分の故郷だった。家が内海の側だったので、毎晩鮮やかに輝く夕日を家族のみんなで見ながらご飯を食べて、部屋の中からその、信じられないくらい広くて静かな中海の水面に光る月を眺めながら眠りについていた。

それにしても、私の日常生活の周りに、トーチカや戦跡が当たり前のようにあった。父がロイ・ナムル島（ルオット）に毎日飛行機で通っていたが、たまに家族と一緒にいった。父が壊れているコケのついたコンクリートの建物や神秘的なジャングルを指さしながら「ザ・ジャパニーズ」という言葉を、島の案内をしながらかたさん言ったのを覚えている。海でも、親がよく一人でダイビングして「日本の船」を見てきたお土産話もしてくれていた。でも、私は何故そういう船や古い建物がたくさん残っているか、よく分から

なかった。

七歳のある日、勇気を出して島の端まで自転車で遊びに行つたとき、そこで新しい発見をした。赤い門のようなものが滑走路の近くに目立っていた。近くで見ると、赤い鳥居で（当時何なのかわからなかったが）、英語と日本語で「日本人墓地」と書いてある標識があった。

そのときに、日本人がたくさんこの島で亡くなられたことを初めて知った。戦争。この平和の島クワジエリンでいったい何が起こつたんだろうとそのときから思い始めた。まさか二十五年後、その同じ慰霊碑に遺族の方と一緒に参りに行くということ、当時夢にも思わなかった。

その後、クワジエリンを離れ、親の故郷アメリカニュージャージー州に移り住んだが、それからあの慰霊碑の赤い鳥居のことも忘れられず、日本に対しても深い興味を持つていた。高校二年の夏休みに日本の短期ホームステイプログラムに参加する機会を得て、一ヶ月間滞在した。何となく、初めて見た日本海や小さな町がすごく懐かしい雰囲気で、すぐに好きになった。そのきっかけで、それか

ら何度も憧れの日本に留学したりして、結局、大学を卒業してから日本で働くことになった。あまりにも日本が好きになったので、気づかないうち十年近く住むことになった。その間、当然たくさん学ぶことができたが、次第に日本と太平洋諸島の関係や戦争についてもいろいろ覚えた。留学のときにお世話になった家族のおじいさんが海軍に入っていた頃の話をよくしてくれた。

そして、たまたま三年間国際交流員として働いた宮崎県南郷町が遠洋漁業の船がマーシャル諸島まで出港する港町だという奇遇なことまでがあった。その後、二〇〇〇年の宮崎で行われた九州・沖縄サミットの事務局員として働いているとき、マーシャル諸島の大統領等が来日して、私が担当することになった。「クワジエリン島出身のあなたがなんで日本にいるのか。早くマーシャルに帰りたいなさい！」と大統領に笑いながら言われた。その同じ年、父が癌で亡くなった。クワジエリンまで家族を連れて行つてくれた父の思い出に、その夏、やっと二十年ぶりに一人でクワジエリンに帰った。

とても懐かしくて、やはりいくら「米軍基地」であつても、自分の故郷だったし、父が大好きだった島だと強く感じた。しかしクワジェリンに帰ったら、父の思い出だけでなく、他にもいろんな記憶がその島に重なっていると気づいた。私の視点だけでなく、数えきれないアメリカ人日本人、マーシャル人も、クワジェリンに対して強い想いがあると気づいた。

このようにいろいろな感情が入り交じる故郷の島クワジェリンのことを語り継ぎたいと思った。アメリカ人と日本人の間、そしてマーシャル人や島の人の間で理解の相違や忘れられた歴史が多々ある太平洋諸島では、このような作業が今後の平和のために本当に必要だと思うようになったその強い意思で、大学院に入り、ハワイ大学の太平洋諸島学の修士課程を経て、現在はオーストラリア国立大学のクロスカルチャー研究所の博士課程において、日本や太平洋全体の歴史を新たに見直すために、クワジェリン環礁の多くの人の話を集めている。今回の旅で、遺族会の方々の心を通じて、クワジェリンで亡くなった男性達にも出会え

た。昔の写真、手紙、日記など見せていただけたおかげで、実際に皆さんの貴重な家族の性格と人間らしさが見えてきた。彼等の勇気や温もりを、感じた。少年時代から彼等の足跡を意識していた、日本にも第二の故郷を見つけた私にとって、やっとこういう「出合い」ができて嬉しい。やっと「ザ・ジャパニーズ」としてではなく、ちゃんと彼等の名前と顔を知ることができた。一緒にお参りし、懐かしいクワジェリンを日本の皆さんの目を通して見る事ができたのも貴重な経験だった。不思議にも、私と同じように、遺族の方がクワジェリンをある意味で「故郷」として考えていることもとても印象的だった。

ルオットの慰霊祭のとき、マーシャルの白い鳥二羽が鳥居の上で飛び、私たちを優しく観察していたことも忘れられない。マーシャル語で「ケアル」という鳥で、船が迷い込んだときに家まで案内してくれる、幸運の鳥だと言われている(写真③)。

この一瞬のことを、奇跡的に写真に写ることができた。その鳥が私たちに大事

なメッセージを送ろうとしていたかもしれない。はるか昔、クワジェリン島の南に大きく、豊かに実る木があつたというマーシャル人の物語がある。その貴重な花や実を採りに世界中の人が集まりに來たとする。その木の花が海に落ちると、世界中の人が食べられるくらいの魚が生まれ、また一度その木の花をとったり、実を食べたりすれば、そこから離れたくなくなつて、いつもクワジェリンに帰りたくなるらしい。そのようにしてクワジェリンを愛する人々が繋がり、「平和の島」として知られている。

今回の旅のおかげで、このように、クワジェリンという平和の故郷を通じて我々が繋がっていると分かった。遺族会の皆さんに心から感謝を申し上げます。

※この研究の資料として、クワジェリンの戦没者を知るための昔の写真、手紙、日記などを拝見させていただいたら幸いです。ご遠慮なく、ご連絡ください。

〒三三五・〇〇一 埼玉県戸田市下戸田
二・一三・二シリウス戸田一〇五号
グレッグ・ドボルザークまで。

(gregdvorak@mac.com)

松平永芳氏逝去



平成十七年七月十日、元靖国神社宮司・マーシャル方面遺族会篤志会員松平永芳氏が帰

幽された。九十歳。同氏は、大正四年子爵松平慶民氏の嫡男として出生。幕末維新期に、越前福井藩の名君として国事に尽力した松平春嶽公の嫡孫にあたられる。

昭和十二年海軍機関学校卒業後、海軍士官として従事。海軍少佐、第十一特別根拠地隊参謀としてサイゴンで終戦を迎え、戦後は陸上自衛隊に勤務、戦史室において陸海軍の記録収集整理等に従事された。昭和四十三年退官後は福井市立郷土歴史博物館長退任後も同館の顧問をされていた。

靖国神社においては急逝された第五代筑波宮司の後任として昭和五十三年七月一日に第六代宮司に就任された。在任中は、昭和殉職者（A級戦犯）の合祀、御創立百十年記念大祭の奉仕、遊就館の再開、御本殿修築工事、御創立百二十年記念大祭の奉仕、また齋館、社務所の建築、

靖国神社奉賛會（現崇敬奉賛会の前身）の創立等数々の業績を残された。（「靖国」平成十二年九月一日号を参考）

晝間楽平氏（本会副会長）急逝



平成十七年八月十八日、当会の副会長である晝間楽平氏が急逝された。八十三歳。

先々代の浮田会長当時より本会の役員として会の行事運営に常为中心的な役割を分担してボランティア精神を身をもって実践されたことは誰もが認めており、かけがえのない役員でありました。

体調の不振を訴えられるまでは当会の要職にあり、年齢を感じさせない程元気で「英霊のため奉慰を続けることは生き残った私のつとめです」と言われていたことは本会として、本当に残念でなりません。痛恨の極みです。

沖縄旅行（東京都遺族連合会）を思い出すと名残が尽きません。心からご冥福をお祈り申し上げます。（黒川誠）

賛助金寄贈者（敬称略）

- 植川二男 五千元
- 井上賀雄 一万円
- 晝間楽平 三万円
- 藤原和子 五千元

●ご注意 最近「何々戦記」と称する本が会員に直接電話で勧誘して送り付けるという行為があり、会員から問い合わせがあります。価格は三万から四万とかなり高価な本です。本会ではこのような出版物の勧誘も推薦もしておらず一切関係はありません。会員各位にはくれぐれも十分にお気をつけ下さい。

【奥付】

- ◆環礁・本部だより第13号
- ◆発行日 平成十八年二月一日
- ◆発行人 黒川誠
- ◆マーシャル方面遺族会本部 千四二・〇〇五
- 東京都品川区平塚三・四・十七
- 電話 〇三三七八三・八三八二
- ファックス 〇三三七八三・八三八四
- 振替 〇〇二〇〇・〇九三四八七



①現地慰霊参加者（前列右より・敬称略）高林・鈴木進・井上賀夫・森井・伊藤政一・伊藤十一・佐竹（後列右より・敬称略）腰川・佐藤隆一・奥井禮子・藤田・浜田・鈴木友季子・菊地・スタイブ司令官・一人おいて井上庸子・佐藤知子・テラー報道官・油井・植田・泉水・奥井國夫・藤原和子



②スタイブ司令官よりカヌーの記念品を贈られる井上賀夫団長

③ルオット島慰霊祭に飛来した「ケアル」

④参加者揃って慰霊碑の清掃